

勝手に助けること

編集者 白石正明
しろいし まさあき



30年以上前の話である。阪神・淡路大震災があった数週間後、担当著者だった社会福祉学の教授が、知り合いの特別養護老人ホームにボランティアに行くと言う。そこを拠点に避難所へ出向いたり、一番被害のひどかった長田地区の高齢者の状況などを調査するらしい。教授が「白石くんも行かへんか？」と実に気軽に声をかけてくれたので、一度そうしたことをやってみたかった私は、渡りに船とばかりに飛びついた。

そこで出会った様々なことはここには書ききれないが、印象に残っているシーンがいくつかある。避難所では人々がナーバスになっているとか、エラそうにすると嫌われるとか、現地の情報を事前にどこ

かで仕込んでいた私は、どんなことが起こるのかビクビクしていた。ところが、教授はガラガラと避難所の戸を開けると「何かお困りのことはありませんか？」といきなり大きな声で叫んだ。そして目の合ったお年寄りのそばにしゃがみ込んで、あれこれと用事を聞いていた。

その時の私の感想を一言でいえば、拍子抜けである。「あ、こんなんでいいんだ」と。笑顔が優しいその教授ならではのかもしれないが、「困っている人を助けにきました」以上でも以下でもないメッセージは、意外に相手に伝わるものなのだ。「何か正しい方法がどこかにあるはずなのにそれを知らない私」という自意識でモジモジしていた自分が恥ずか

しくなった。

拠点となった特養ホームにはいろいろな人が寝泊まりしていて、朝になるとボランティアに出かけていった。事前の予想と違って、彼らは実にあっさりとした人たちだった。困った人がいれば助けるし、邪魔だと言われれば身を引く。ただそれだけ。

彼らを見ていると、行政の人たちは物事をすごく「考えている」と思った。例えば公平性の原則。この人を助けるならあの人も助けないと平仄が合わない、さあどうするか。やや強調が過ぎるかもしれないが、そんな印象が強かった。しかし神戸で出会ったボランティアたちは真逆だった。目の前に困っている人がいれば、どんな手を差し出す。「考えない」で勝手に助ける。ルールや秩序を超えて人助けをする。

この1995年は「ボランティア元年」と呼ばれた。約30年後に能登半島地震が起こったわけだが、SNS上では「なにカッコつけてんだよ」「地元は迷惑している」といったボランティア批判が目立った。現地に行つて働いている人をこたつてミカンを食べながら眺めている自分への、うっすらした罪悪感と羨望をなんとか解消したい。そんな欲望に駆られていただけだから、別に相手にしなくてよい。私に気がなったのは、その冷笑ぶりを見て「この30年で人はずいぶん変わってしまった」といった感想を

漏らす良識派がいたことである。しかし私は、「んなわけないだろ、昔からみんな冷笑的だったよ、ただそれを表す手段(SNS)がなかったので目に入らなかっただけだ」と思っている。

60年安保闘争当時、時の首相岸信介は「国会周辺は騒がしいが、後樂園球場はいつもどおりだ。私には声なき声が聞こえる」といったコメントをして大いに反感を買った。「声なき声」の内容を自分に都合よく解釈していると批判されたのだが、冷静に考えれば彼の言うとおりかもしれない。

当時の後樂園球場の観客がもしもスマホを持っていて暇つぶしに呟いたとしたら、能登半島地震でのボランティア批判と同様に、「使命感に駆られて何かやっている人」への冷笑に満ちていたのではなからうか。かつては「声なき声」で済んでいたものが、呟く手段を手にした瞬間、彼らは、声を出す必要のある人を揶揄せずにはいられなくなった。いつだってブルシット・ジョブ(無意味な書類仕事)はシット・ジョブ(直接労働)を憎むのだ。

そもそも困っている人は、常に少数派ではないだろうか。その少数派の困っている人たちに助けの手を差し出すのは、さらなる少数派だ。そういうものだと思う。だから肅々と、目の前の人を勝手に助ければよいと思は思う。

時の調べ Essay

略歴
1958年東京生まれ。医学書院にて「シリーズ ケアをひらく」(毎日出版文化賞を創刊。同シリーズでは川口有美子「逝かない身体」(大宅壮一ノンフィクション賞)、熊谷晋一郎「リハビリの夜」(新潮ドキュメント賞)、國分功一郎「中動態の世界」(小林秀雄賞)、東畑開人「居るのはつらいよ」(大佛次郎論壇賞など約50冊を刊行。2025年4月に初の著書「ケアと編集」(岩波新書、2026新書大賞第4位)を上梓した